

「神学とは何か？ 新約聖書神学の視点から」

中野 実

導入：

前回のショートレクチャーにおいて「神学とは何か」というテーマでお話をしました。今日はそのテーマは、私自身の専門分野、新約聖書神学の視点から取り上げてみたいと思います。

私は新約聖書の研究者です。方法論的には歴史学的文献学的手法をもちいて新約聖書という古代の文献に取り組む研究をしています。聖書は古代の文献ですから、いろいろな視点から研究することが可能です。例えば、特定の信仰的立場からではない「宗教学」的視点、どこまでも人間理解という課題と取り組む「人間学」的視点も可能となります。しかし、私は他の視点と方法論的には同じような手法を用いつつも、(前回お話したように)どこまでも教会に仕え、神に栄光を帰する「神学」という学問の枠組みにおいて研究を行う者です。

そのような学問を営んでいる者として、神学とは何かということを以下において考えて行きたいと思います。

本論：

Ⅰ 神の啓示を証言する聖書

○「神学」=Theology

「神学」を意味する Theology (セオロジー) という語は、Theos(セオス=神)+Logos (ロゴス=言葉) から成り立っている。つまり、セオロジーとは神についての言葉を意味する。しかし、神学は人間の知恵によって神を認識することを追求する学問ではない。神の認識は神ご自身の関与なしにはありえない。それがキリスト教の大切な考え方。神学、つまり神について語ることは、神からの啓示を前提としてはじめて成り立つ。

○神からの啓示 (Revelation) とは？

聖書の神は「隠された神」。まことの神は目に見えず、この世界を超えておられる方。それ故、人間の知恵では到底認識できない方。しかし同時に、自らを啓示される神。この神の自己啓示を受けとめるところから、神学の営みは始まる。

○神の啓示を証言する書物としての聖書

代々の教会は、聖書を神の啓示の証言の書、神の御心を知ることのできる源泉と見なしてきた。キリスト教の聖書=旧約聖書+新約聖書。プロテスタント原理の一つは「聖書のみ」(Sola Scriptura)。しかし「聖書のみ」というのは聖書だけあれば良いという意味ではない。教会は(プロテスタント教会は特に)、聖書を中心に、理性、伝統、経験などを用いつつ、神の啓示を理解してきた。聖書が証言する神の啓示のわざ。人間の証言である限り、多様また断片的でもある。しかし神は、そのような人間の証言を用いて、自らを啓示し続けてくださっている方。

II 聖書を通して神の啓示の足跡をたどる：聖書神学

聖書神学的問題意識をもって、聖書の中で証言されている神の啓示のわざを、啓示される神の足跡を探っていきたい。目に見えない、人間の知恵を完全に超越した神は、自らを啓示される神。神は、常にこの被造世界と向き合ってください。向き合うだけではなく、この世界、歴史のただ中にまで到来してくださる方。

神学、とくに聖書神学は、この神の啓示が残した足跡を聖書の中に探し求めつつ、それをたどるような歩み。もちろん、聖書の証言する神の啓示は、人間による証言である限り、なお「部分的」で「おぼろげ」なものかもしれない（1コリ 13 章）。しかし、確かにそこに神の啓示の足跡を見出し、たどることができる。

そこで、以下の五つのポイントに分けて、聖書が証言する神の啓示の業をスケッチしてみたい（この五つのポイントは、フェルディナント・ハーン『新約聖書神学II 上』大貫、田中訳、日本キリスト教団出版局、2013年に基づく）。

- (1)創造と世界の歴史における啓示、
- (2)イスラエルの歴史における啓示、
- (3)イエスの人格と歴史における啓示、
- (4)聖霊の働きにおける啓示
- (5)終末における啓示

III 聖書を通して見えてくる神の啓示の業

(1)創造と世界の歴史における啓示

神は創造の御業において自らを示される方。創世記 1-2 章を参照。世界を創造し、それを祝福される神 (Creator)。そして、被造物を守り導く神(Sustainer)。これに関して、詩編 19:1-7 および 24:1-2 を参照。

「天は神の栄光を語り、大空は御手の業を告げる。昼は昼に言葉を伝え、夜は夜に知識を送る。語ることもなく、言葉もなく、その声は聞こえない。その声は全地に、その言葉は世界の果てにまで及んだ。そこへ神は太陽のために幕屋を張った。太陽は花婿のように祝いの部屋を出て、勇者のように喜び勇んで道を駆け抜ける。天の果てを出で立ち、四方の果てまで行き巡る。何一つその熱から隠れるものはない」(詩編 19:1-7)。

「地とそこに満ちるもの。世界とそこに住むものは主のもの。主が大海の上に地の基を築き、大河の上に世界を据えたから」(詩編 24:1-2)。

このような神の姿は、新約聖書でもイエスの口を通して語られる。「父は、悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである」(マタイ 5:45)。

しかし、新約聖書においては新しい要素も加わる。

* 創造の業に参加された先在のキリストの姿

コロサイ 1:15-17

* 新しい創造の業

II コリント 5:17、黙示録 21:1

(2)イスラエルの歴史における啓示

* イスラエルの民を選ばれた神。申命記 7:6-8 を参照。

「あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は、地上にいるすべての民の中からあなたを選び、ご自分の宝の民とされた。あなたがたがどの民よりも数が多かったから、主があなたがたに心引かれて選んだのではない。むしろ、あなたがたは、どの民よりも少なかった。ただ、あなたがたに対する主の愛のゆえに、また、あなたがたの先祖に誓われた誓いを守るために。主は力強い手によってあなたがたを導き出し、奴隷の家、エジプトの王ファラオの手から、あなたを贖い出したのである」。

* 族長たち、モーセ（出エジプト、シナイ契約、十戒）、さらにダビデ、ソロモンたちに対して神は自らを啓示された。しかも契約という仕方です。

* 例として、アブラハムに対する神の自己啓示および契約の締結。創世記 15 章を参照。

* 新約聖書でも、イスラエルに対する神の自己啓示、それに基づく神の特別な選びについて語られる。

ロマ 9:4-5

「彼らはイスラエル人です。子としての身分、栄光、契約、律法、礼拝、約束は彼らのものです。先祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストも彼らから出られたのです」。

ロマ 11:28-33

「福音について言えば、イスラエル人は、あなたがたのために神に敵対していますが、神の選びについて言えば、先祖たちのお陰で愛されています。神の賜物と招きは取り消されることがないからです。・・・ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。神の裁きのいかに究め難く、その道のいかにたどり難いことか」。

(3)イエスの人格と歴史における啓示

* 神の啓示とは？神がどのように人間と、そしてすべての被造物と関わってくださっているか。創造から終末にまで及ぶ神の啓示の業。

* イエスにおいて、神の究極的救いの啓示がなされた。

ヘブライ書 1:1-2

「神は、かつて預言者たちを通して、折りに触れ、さまざまなしかたで先祖たちに語られたが、この終わりの時には、御子を通して私たちに語られました」。

ヨハネ福音書 1:14

「いまだかつて、神を見た者はいない。父の懐にいる独り子である神、この方が神を示されたのである」。

* 新約聖書においては、その啓示の問題をイエス・キリストの人格と歴史と結びつけて考える。これが新約の神学思想の新しい側面。先在のキリスト、地上の、受肉のキリスト、復活と高擧のキリスト、再臨のキリスト。キリストの全体において神を啓示する。

*すでに述べたように、イエスの地上への出現＝神の究極的救いの啓示。しかし、なお完成のものではない。けれども、イエスの到来によって、神の王的支配、永遠の命が始まった！このように究極的救いの出来事がイエスの出来事において既に先取りされて明らかにされた点が重要。

(4)聖霊の働きにおける啓示

*聖霊の働き：創造の初めから。創 1:2「神の霊が水の面を動いていた」、創 2:7「神である主は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き込まれた」。

*救いの歴史全体を通して働く神の霊：知恵と預言の霊の働き。

*しかしイエスこそが、特別な神の霊の担い手であり、その与え手である。

*復活後の教会の歩み。特別な聖霊の降臨によって開始された教会の歴史。聖霊によって担われる福音宣教。洗礼と聖霊の注ぎ。聖霊の賜物。

*聖霊の働きとは？常に新しく神の啓示を認識、体験させる働き。パラクレートス（弁護者）。ヨハネ 14:26「しかし、弁護者、すなわち、父が私の名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、私が話したことをことごとく思い起こさせてくださる」。

(5)終末における啓示

*終末とは？究極的救いの完成の時。創造と救済、そのすべてが完成へと導かれる。それが神の御心。

*イエス・キリストの到来において、すでに終末的事態が開始された。これが新約聖書の大切な洞察。神の支配、永遠の命の開始。

*そのようにすでに進行している終末的啓示の出来事が終結する時＝救いの完成としての終末。

*終末の出来事とは？

イエス・キリストの再臨：パルチア＝世界の正当な主、王として訪問、現臨されること。

死者の復活＝死への完全な勝利、新しい創造の出来事。

最後の審判：歴史における不義に対する神の義の啓示。

IVまとめと展開

○「信」（ピステイス、信頼、信仰）の大切さ。

神の認識は、何よりも先行する神の自己啓示に基づく。

啓示に、「信」をもって参与する人間。

「信」＝信頼、信仰。神の賜物としての「信」。

神は私たちと出会い、呼び出す。それに対して私たちは応答する。その応答が「信」。

○スケッチの結果

神の啓示の足跡をたどると、失われた私たちを神の子として再び取り戻し、新しく創りかえる神の御心と御業が見えてくる。それは、一貫した仕方で、しかもイエス・キリストにおいて完全な仕方で啓示された。

○神の啓示の出来事を聖書神学的視点で聖書を通して観察してきたが、この点について、他の神学分野の視点からもさらに深く学んでいく必要あり！